山と博物館

第５４巻　第９号　２００９年９月２５日　市立大町山岳博物館

刻語り

髙橋　貞夫

信州を縦断して連なる北アルプス。蓮華、爺、鹿島槍ヶ岳、故郷から望む岳は凛凛しい雄姿を現している。険しい頂上を目指して多くの登山者が登る。いつの世も、岳は人々を魅了してやまない。

昭和三十年、新農民美術研究所へ入所したのが木彫との出会い。上田市で八年間学び、諸先生方より指導を受けた。当時はまだ徒弟制度が残っており、きつい修行の日々を過ごした。晴れて修行を経え故郷へ戻った時、厳しさ漂う故郷の美をあらためて感じたことを懐かしく思いだす。生家の土蔵で一歩を踏み出したが、希望と不安の船出であつた。豊かな自然に包まれて、どんと聳える岳を仰ぐ。目前の自然は四季折々の情景を映し、感動の瞬間に多々出遭えた。私にとって岳は故郷そのものであり、堂々とした姿に心揺すられ、理想を持って生きたいものと願ってきた。

来た道を振り返ると、年齢に平行してさまざまな時代があった。二十代、三十代は若さにまかせて厚木に対峙した。大町市所蔵作品「聖なる行」「親童感」、松本市県民文化会館壁画彫刻「月天樹天」はその最たる作品であり、今観ても当時の活力を感じさせる。近年、木彫と漆を組み合わせる独自の技法を「彫彩」と名付け、徐々に作品に取り入れてきた。彫彩とは漆板にノミで直接彫り込み、多様な彩色をもって完成し華やかさを感じさせる作風。今後はより彫彩の完成を目指したい。

大自然の美を現すとともに、仏像の世界に取り組んできた。青年のころ修行僧になりたいと本気で願ったほど、仏像に魅せられてきた。ある寺で語り継がれている物語を知り、感動とともに作品に表現した。自分なりの仏像を彫刻した作品群は昨年寺院へと寄進された。仏像の御許に飾られ、大勢の皆さんに観ていただく機会を得たことは、不思議なご縁であった。

この地に住み、人々と触れあい、心を映してこつこつと進む道。気負いなく往きたいものと思う。

悠久の刻　180×120　　髙橋貞夫

特別展

刻（きざむ）―凛然の軌跡
髙橋貞夫展

会期　平成21年9月10日～10月4日
会場　大町山岳博物館

髙橋　貞夫

月光樹

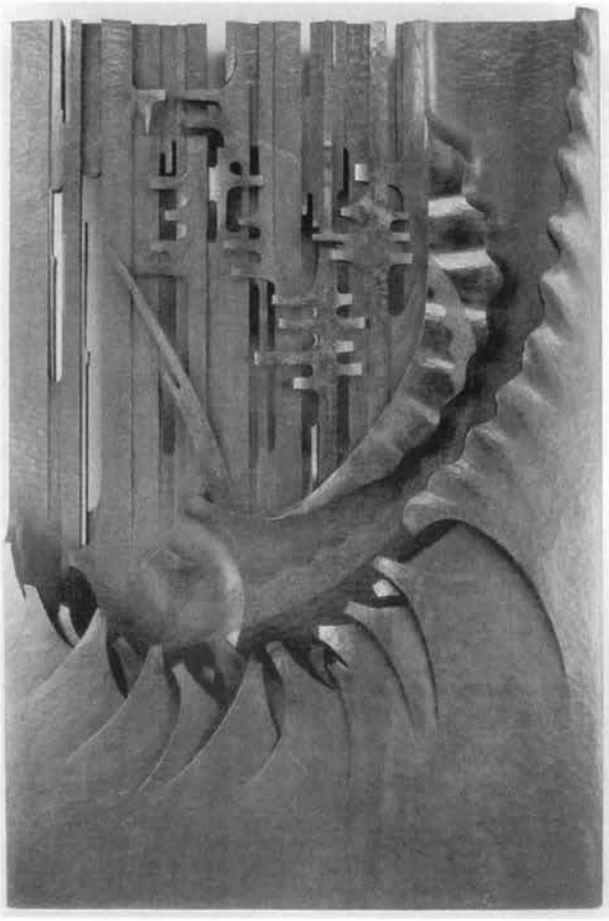
凍てついた夜、淡い月光が地上にふりそそいでいる。冠雪した岳々に、樹々に抱かれて眠る生き物たちを優しく包むように。深深と更けてゆく故郷の夜は清らかで美しい。

生々・翔流

夜が明けきらず東の空が白む前の一時、岳も森も静寂に包まれている。東山に太陽が顔をみせると、岳は刻々と色を変え茜雲は流れて、辺りは生き生きと動きだす。翔けていく時に、今日一日の充実を願う。

樹爽

中空に浮かぶ雲は陽光と交じり光模様を演出し、風は緑韻のかおりをかかえて樹々の空間を吹き抜けていく。小鳥は新芽に止まり、花は美しさを競い合って咲いている。明るい、爽やかな季節の到来。人に会話があるように、自然界も対話をしているようだ。



月光樹　180×130

歓喜樹生

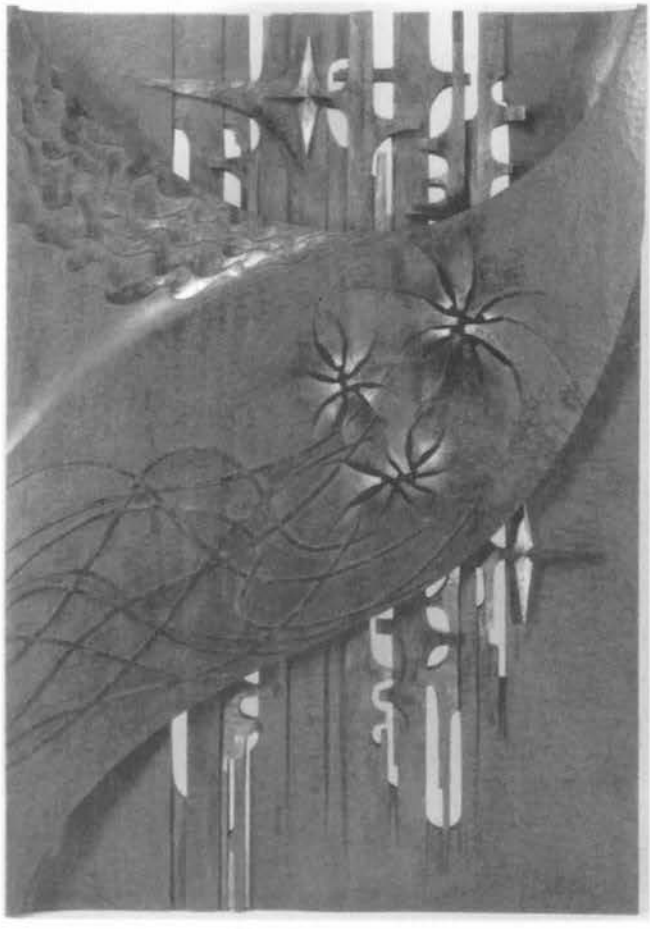
岳には不思議な力があり、人を寄せ付けない厳しさと、生物を、おおきく包み込む温かさを持っている。朝に夕に、生き生きと変化する岳の素顔に歓喜したり、圧倒される存在感に励まされたりする。私は早春の岳が気に入っている。

樹華相奏

雪が溶け始め寒風もやや治まり、厳しい冬を過ごして縮こまった体の脇を　微風が吹いていく。樹木が芽吹き鳥たちは音楽を奏でて、華やかな春の予感をつたえている。風が、時を動かしてゆく。

悠久の刻

来た道も往く道も、宇宙のなかの一瞬の刻。無言で語りかける神秘な空間に想像を膨らませ、見惚れ、励まされて久しい。立ち止まり振り返ると、厳しく悠遠の道であったと思う。今からも、大いなる自然の声を心に記し、大地を踏みしめ前進し、未来へと継なげたい。



樹　爽　180×130

樹　炎

初冠雪を頂に里へと織る紅葉の錦絵。樹々が炎のように燃えている。すぐそこに訪れている冬の到来に思いを馳せ、ひとときの美に惹きこまれる。

未来樹

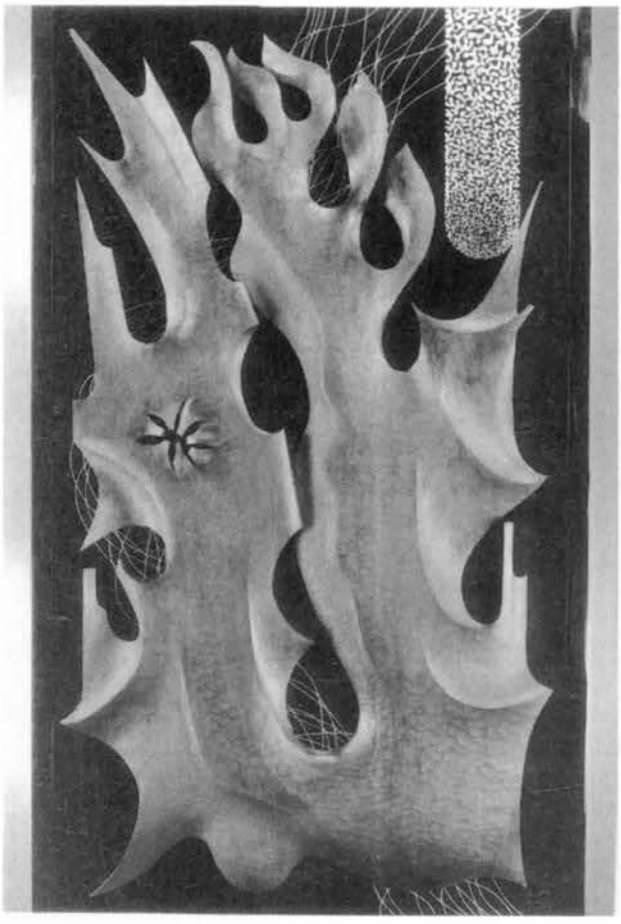
庭に婆羅樹（しゃらのき）を植えた。ちいさな木だったが大地にしっかり根づき、四年が経った今、一階の屋根の高さまで育った。未だ未だ逞しく育ち大木となる日が来るだろう。朝、カーテンを開けてながめるのが楽しみだ。

点の軌跡

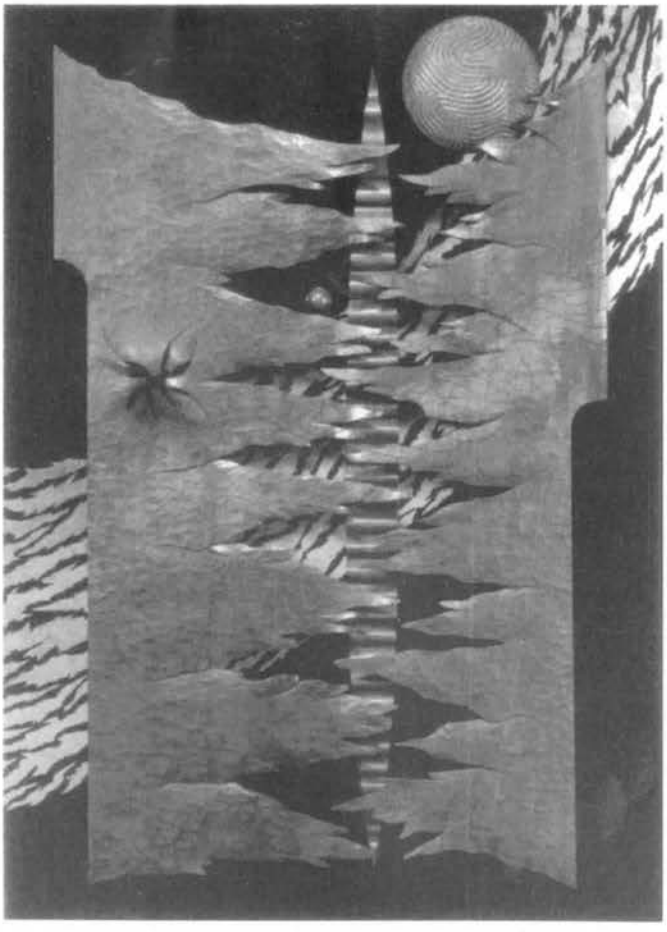
強い意志を持って、一筋の道を歩んできた。時折、軌跡を振り返ったりしながらも、少しずつ前進してきた。終着点に辿り着いたような気がして歩みを止めると、まだまだ先があった。そんな思いの繰り返し、一生学びの道である。

慈　恩

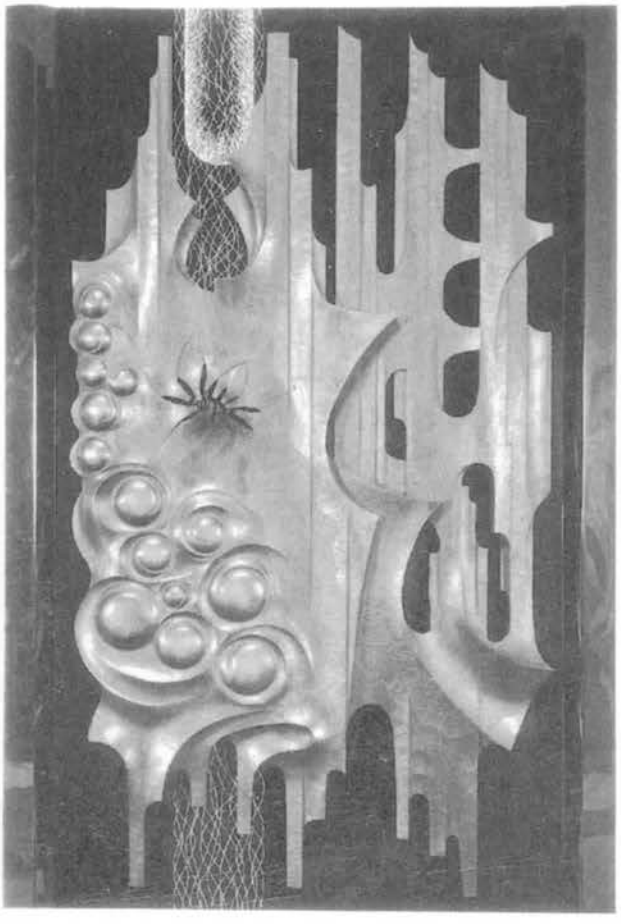
暖かいお心で慈しみ育ててくださった先生がおりました。数々の思い出、思いがけないエピソードは恩人である先生との宝物であります。父の顔も知らない私には、父親のように思える先生でありました。



樹　炎　　180×120



点の軌跡　　170×120



未来樹　　180×120

森の風韻

凛と聳える岳を頂に、豊かな樹林が一面を覆う。風にゆれる木々の空間は、万物の行き交う道。深い森に包まれて花は咲き、実は熟し、岩を縫う湧水の流れに生き物たちが憩う。緑韻のかおりとともに音が聞こえてくる。自然との共生を願う人々に、大自然はさまざまなことを問いかけてくる。

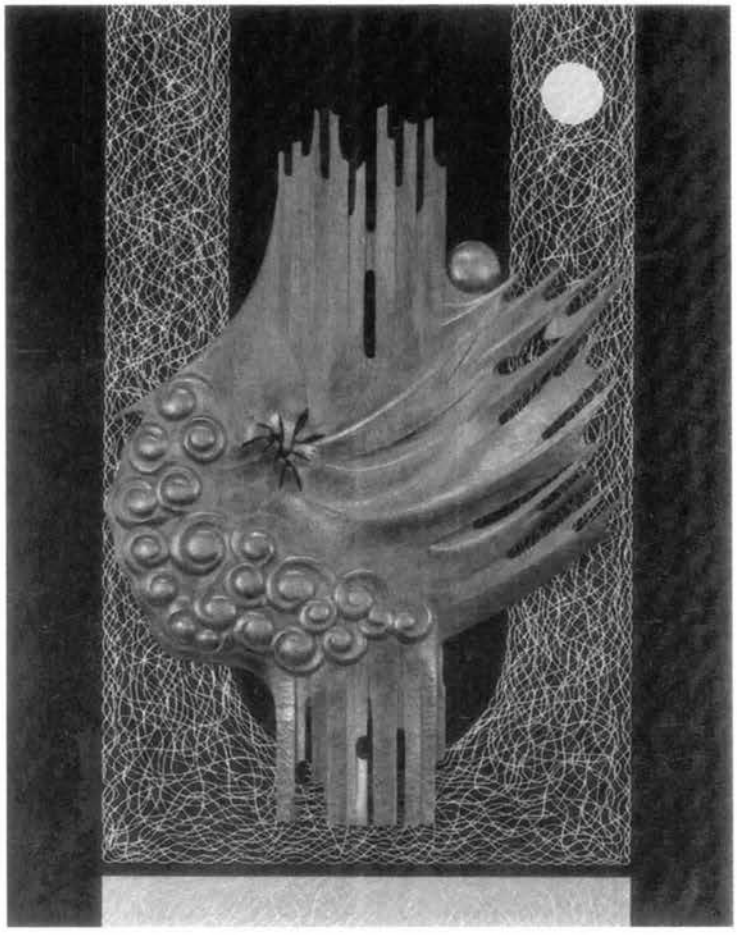
葉　森

芽吹きから紅葉、冬枯れへと移ろい、季節を伝える深い森。風にゆれて枝葉のささやきが聞こえてくる。溢れるほどの緑のなかで深呼吸すると、澄んだ大気に包まれて生きることの歓びを思う。私達は幼いころから、しらずしらずのうちに癒されている。

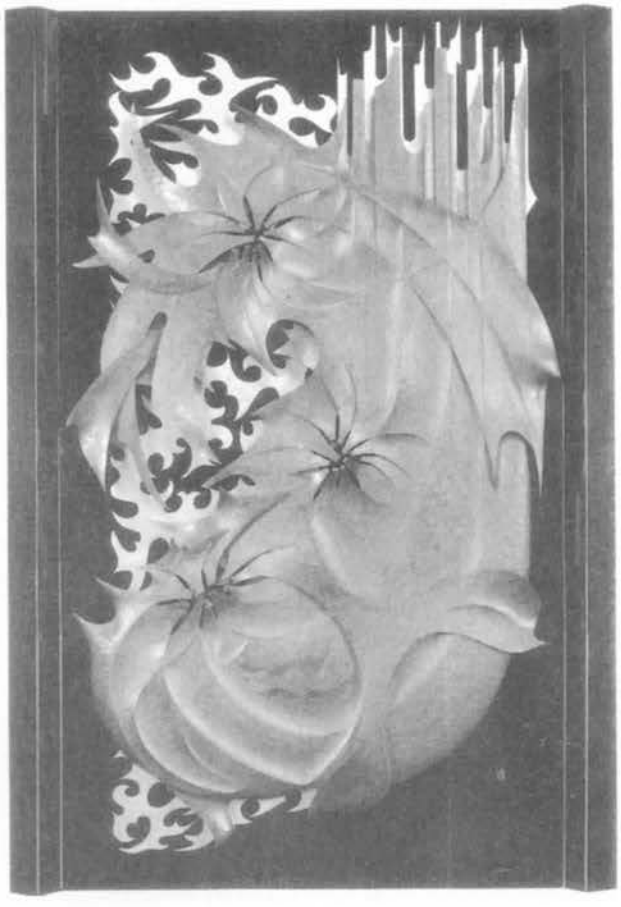
無窮の彼方

無から窮めるには、素質と精を出して励み継続すること。往く道は険しく、夢を為遂げるための挑戦は果てしなくつづく。

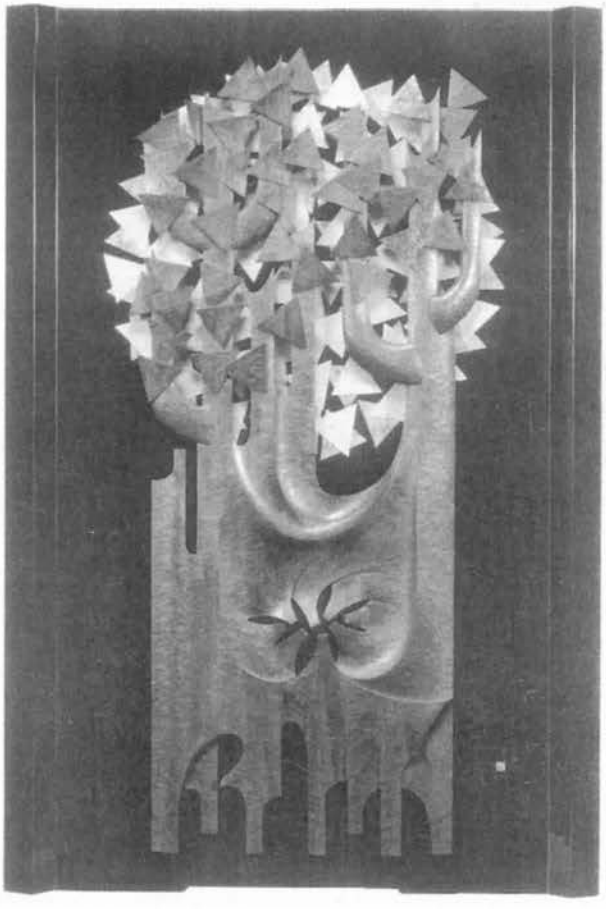
永遠の宇宙、沈黙の彼方からの伝言が五感を通して泌み入ってくる。



森の風韻　　170×120



無窮の彼方　　180×120



葉　森　　180×120

凛然の奏

凛として立つ一本の大樹。大自然に渦巻く厳しい風雪を一身に受け、すべてを守ろうと楯となる。往く道の覚悟と厳しさをおもう。

夢樹

樹齢百年近いのだろうか、欅の古木が実に真っ直ぐに空にむかって伸びている。その見事な立姿は、みる人に、希望と夢を叶える活力を与えてきたのではないだろうか。繁った葉に覆われた欅を、只只見る。

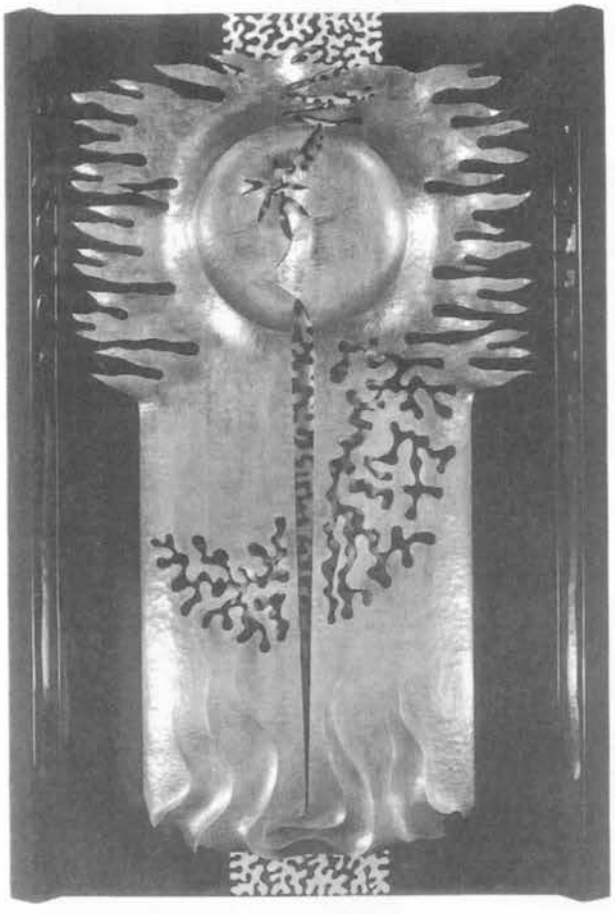
殊花

悠久の大地に咲き乱れる花紅葉、清艶なさまが殊更胸を打つ。菩薩のこころにつつまれて煌く命に合唱し、道を歩む。

千手童女

京都・清水寺へ作品を寄進させていただいたご縁から知った、山形村の清水寺。春の日、探し訪ねついた山形村の清水寺。こじんまりしたお堂に千手観音像が安置されており、参拝させていただいた。この地には京都・清水寺との心打つ物語があった。ある日、テレビの画面で大勢の娘さんが千手観音の舞踊を舞っていた。聴覚障がいの娘さんたちとは思えない寸部の狂いもない見事な舞いに、春の日の千手観音のお姿が自分のなかで重なった。おおきな感動を覚えた。

凛然の奏　170×120



殊　花　180×120

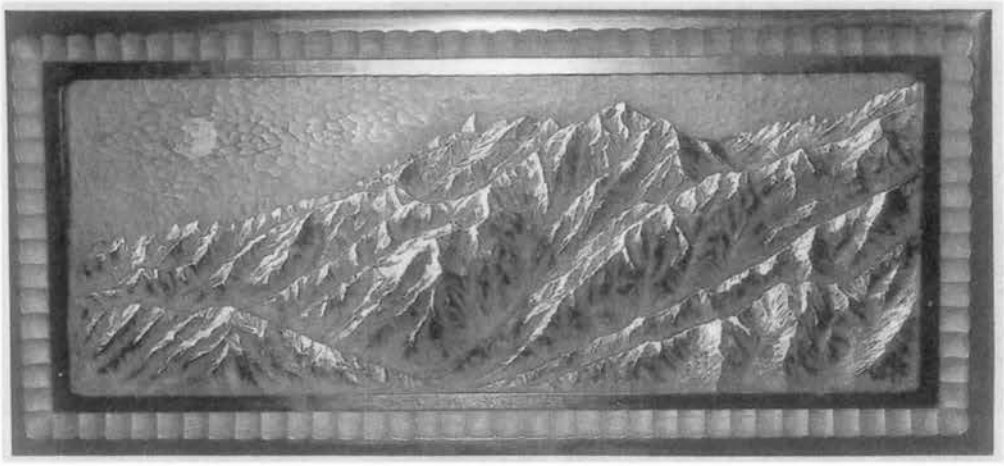
夢　樹　180×120

天衣（てんね）

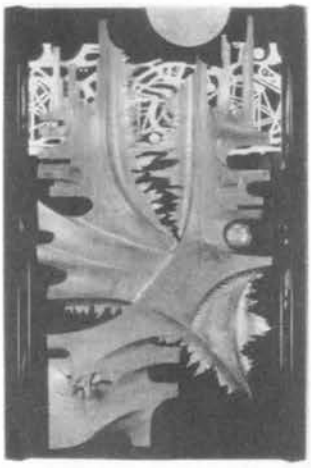
天衣を纏った仏像の前に立つと心が高揚し、よく寺院を訪ね歩いた。その思いは、今も変らない。神々の座・岳の、前山や樹林をやさしく従えて立つ尊い姿は、まるで仏像のよう、と思う瞬間がある。

（㈳日展評議員
㈳現代工芸美術家協会理事　長野会会長）

槍ヶ岳の雄姿　66×43



霧迫る西穂高連峰　67×37

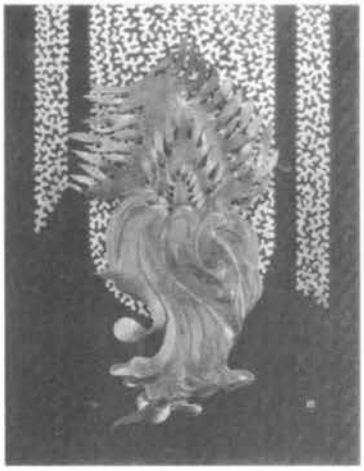


未知への回廊　180×120

樹林の生　160×110

妙舞　170×120

煌風　160×110



月の羽衣　170×120

山と博物館　第54巻　第9号
二〇〇九年九月二十五日発行
発行　〒398-0002
長野県大町市大町八〇五六－一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一－二二－〇二一一
FAX　〇二六一－二二－二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.cityomachi.nagano.jp/sanpaku
印刷　大糸タイムス株式会社
定価　年額　一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇－七－一三二九三

R100　PRINTED WITH SOYINK
この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。